

## ～ 石川組製糸と西洋館 ～

西洋館は、石川組製糸の創業者石川幾太郎が建設した迎賓館の機能を持った洋風木造建築である。

石川組製糸は、明治26年(1893)の操業開始直後より、従来の座繰製糸からいち早く機械製糸に転換し、瞬く間に経営規模を拡大した。最盛期には市内3工場をはじめ県内の狭山・川越市、県外にも福島・愛知・三重・福岡県など、全国に9工場を持ち、大正11年度(1922)の横浜への生糸出荷高では全国6位になっている。

また、石川組製糸は自社の経営拡大を図るだけでなく、市内の産業・文化の発展に大きく貢献した。例えば現在の西武池袋線の前身である武蔵野鉄道の設立に名を連ね輸送網の整備に努めるとともに、幾太郎自身が大正10年(1921)に武蔵野鉄道の社長に就任している。一方で旧豊岡小学校の雨天運動場建設に尽力するなど地域の文化水準の向上にも功績があった。

当時の生糸は、日本が海外に誇る重要な商品であったことから、石川組製糸も他の製糸会社と同様に販売先を海外に求めた。このため外国商人が当地を訪れる機会があり、商談の際に会社の権威を示すために、贅を尽した迎賓館を建設する必要が生じた。

西洋館の建設に当っては、設計を東京帝国大学(現在の東京大学)で西洋建築を学んだ室岡惣七が、建築を川越まつりの山車(以前の中原町の山車)を製作した宮大工の関根平蔵が担当した。竣工日については明らかでないが、棟札により上棟が大正10年7月7日に行われたことが分かっている。

建物は、2階建ての建物(本館)に平屋(別館)が付属する造りになっている。外観壁面は煉瓦調の化粧タイル貼で統一されているが、屋根の造りは、本館が複合ヒップゲブル(半切妻造)で洋瓦葺(当初はスレート葺)、別館は寄棟造の棧瓦葺と変化をつけている。

建築学的には建物外観より内部の構造に見るところがあり、戦後の一時期進駐軍に接收された際に、本館の玄関ホールや和室の床の間、ベランダ、それに別館が改修されたが、創建当初の形状を今に残している。



石川 幾太郎

宮大工の手になる細やかな天井装飾、床の周囲を廻る寄木細工や照明器具は部屋ごとに違った趣向が凝らされている。特に玄関ホールから2階へ上がる階段の造りは、踊り場から天井にかけての長大な窓と一体となり、重厚な雰囲気を漂わせている。また、大理石製の暖炉やサイドボード、椅子などの調度品類の中には外国から輸入されたものもあり、当時の石川組製糸が蓄財した富の大きさを知ることができる。



玄関ホールより階段を望む

石川家は、幾太郎の弟和助がキリスト教の信者であったことから、その影響により一族がキリスト教に改宗している。このため石川家の同族会社であった石川組製糸では、経営や従業員の教育にキリスト教的色彩が強く現れている。例えば当時の製糸工場では「女工哀史」に例えられる過酷な労働が想像されるが、石川組製糸では工女のために家庭夜学校や日曜学校を開設するなど、慈愛に満ちた雇用形態が保たれていた。また、西洋館の西側にそびえる日本キリスト教団武蔵豊岡教会の教会堂の建設に当っても石川家が尽力している。

なお、石川組製糸は、関東大震災による損失(横浜で出荷待ちの商品が焼失)や昭和恐慌の影響により経営不振に陥り、折からのレーヨンなど化学繊維の登場で生糸の需要が減少したことにより、昭和12年(1937)に解散している。その後も西洋館は、石川家により大切に管理されていたが、平成15年に市へ建物が寄贈されて現在に至っている。

### ★周辺地図



### ★交通案内

埼玉県入間市河原町13-13  
 ※公共交通機関をご利用ください  
 西武池袋線  
 「入間市駅」北口 徒歩約7分  
 西武バス  
 「入間黒須団地」バス停 徒歩約3分

### ★お問い合わせ

入間市教育委員会 博物館(アリット)  
 TEL 04-2934-7711  
 FAX 04-2934-7716



西洋館公式フェイスブック

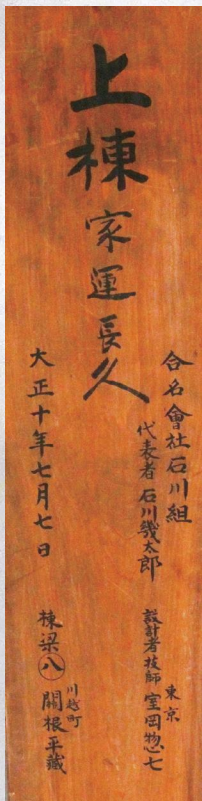
<https://www.facebook.com/irumashiseiyoukan/>

# 国登録有形文化財 旧石川組製糸西洋館

〈 本館・別館 〉



入間市



棟札(部分)